

資料一5 災害教訓伝承素材

① 災害伝承カルタ

過去に天竜川流域で起きている豪雨災害について、災害を経験した様々な立場の人の災害教訓(知識、知恵)、また災害から身を守るために大事なことを子供に伝え、記憶に残すことが、いざというとき、子供たちの命を救うことになる。そこで絵札でイメージを湧かせ、読み札により大切な事柄を伝承することができ、内容を繰り返し遊んで学べる「災害伝承カルタ」を作成した。

【災害教訓伝承カルタのテーマ】

読み札はこれまでの災害教訓や古くからの言い伝えなどを基に自然、歴史、文化、産業、地名等郷土を代表する風土資産を読み込んでいる。また絵札には地域の美しい風土資源や読み札を分かりやすく解説するイメージ図を盛り込み、子供たちが楽しみながら学べるようにしている。




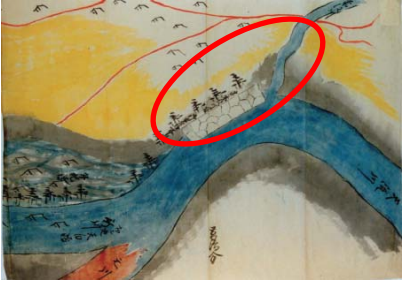
カルタのテーマは「災害」に関するものが10件、「災害教訓」が12件、「土木遺構」4件、「歴史・文化」8件、流域内に伝わる「民話・伝説」が6件、「自然・景観」に関するものが4件となっている。以下にテーマ別のカルタ読み札を示す。





表 5-1 カルタ読み札のテーマ分類

分類	五十音	読み札
災害 (10)	あ	あばれ天竜 わがもの顔であれくるう
	お	大西山の大崩壊 忘れてならぬ36災害
	し	四徳の災害 村人たちの集団移転
	そ	それまでの人知を超えた36災害
	と	伴野堤防一の勿 36災の大被害
	ね	眠らずに作った土のう 一万八千
	の	野底川 今も忘れぬ大氾濫 36災の猛威を思う
	み	湊の町に豪雨と来たる土石流
	よ	与田切に火花散らして流れる大岩
	ろ	労力を費やし行った救済活動
伝説 (6)	い	石神の松が見守る 天竜川
	く	九十九谷決して百まで教えない災害予防の言い伝え
	こ	荒神山 「天竜」生んだ創生伝説
	ぬ	主化けた娘が向かう 深みの池
	む	昔より竜がおさめる 天竜川
	る	るり寺の雨乞いの神 青じし頭
教訓 (12)	き	教訓生かし早めの避難をこころがけ
	け	警報が鳴るまで待たずに自主避難
	せ	瀬音近づき避難の決断 いのちを救う
	に	人間に恩恵もたらす自然の脅威
	ひ	避難後も見回り安全 地域の力
	ふ	普段から心がけよう 近所づきあい
	へ	変化する自然に学ぶ 先人の知恵
	め	目をこらし耳をすませて知る予兆
	も	「もうだめだ」あきらめる前に越えだして

	ら	雷鳥の出ずる山頂荒天で 里川の水嵩瞬時の増水
	れ	連携を最優先に防災活動
	わ	忘れるな あの日の災害いつまでも
土木遺構 (4)	う	聖牛を組み立て堤防守る
	え	絵図を見て 理兵衛堤防いまもなお
	ゆ	ゆるがない 思いを込めた惣兵衛堤防
	り	竜西に恵をもたらす井水と用水
歴史・文化 (8)	さ	さんよりこより みこしかついで対岸へ
	す	水神さま見守る場所に水のご利益
	て	天竜びと 歴史と思いを語りつぐ
	な	中川の歴史を見守る常泉寺
	は	長谷の里、美和湖が語る治水の歴史
	ほ	ほかけ船 天竜川を往来し 今は昔の重いで話に
	ま	埋没林 昔の様子を語り継ぐ
や	闇の中 危険を知らせる半鐘の音	
自然・景観 (4)	か	霞堤 桜に染まり届く春
	た	高遠の三峰の怒りと桜のやさしさ
	ち	散りゆく桜 夏を待つ間に梅雨の増水
	つ	堤の桜 今に残る水防の願い





表 5-2 カルタの概要

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
あ	<p>あばれ^{てんりゅう}天 竜 わがもの^{かお}顔で あれくるう</p>	<p>天竜川は急峻で変化に富む地形を流下するので、溪谷美と激流で知られる。また、急流が脆弱な地層を流下することより、土砂生産が活発な河川としても有名である。このような特徴から、この川は美しい自然景観を楽しませてくれる一方で、洪水や土石流などの厳しい河川環境を引き起こす機会も多くあばれ天竜と呼ばれている。</p>	 <p>平成 18 年 7 月豪雨の記録 天竜川上流の出水 表紙</p>
い	<p>いしがみ 石神の まつ 松がみまもる てんりゅうがわ 天 竜 川</p>	<p>元和の頃、常泉寺に山伏が寄寓していた。この山伏の法力は大変強かったので、村人は天竜川の洪水が起らないように祈祷してもらっていた。</p> <p>山伏は村人の願いをかなえようと必死で祈祷をした。そのために二十一日目の満願の日についに倒れてしまった。山伏が死に臨んで、水神に松を手向けたのが石神の松であると言われており、今もその石神のまつが天竜川を見守っている。</p>	 <p>現地写真</p>
う	<p>うし 聖牛を く 組み立て ていぼうまも 堤 防 守 る</p>	<p>川の流れを弱めるために丸太で組み、根元を蛇籠で固定した聖牛を組みたて堤防を守っている。</p> <p>今でも飯田市(旧南信濃)遠山川に架かる小道木橋のたもとには橋脚の下部に聖牛が設置されている。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p.65</p>
え	<p>えず 絵図をみて りへいていぼう 理兵衛堤防 いまもなお</p>	<p>中川村田島には、江戸時代にきずかれた理兵衛堤防のあとが残っており、今も残る絵図にて確認できる。</p> <p>平成 18 年 7 月上伊那の豪雨災害では天竜川の河床侵食により現存する理兵衛堤防の上流部の川原に埋積していた昔の理兵衛堤防が顔を出し、絵図に残っていた昔の堤防が現れ話題となった。</p>	 <p>天竜川通信 vol.13</p>





五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
お	おおにしやま 大西山の だいほうかい 大崩壊 わす 忘れてならぬ さいがい 36災害	昭和36年6月にわずか1日にして6月の月間平均雨量を越えるほどの雨が降り、伊那谷の多くの場所で堤防の決壊、土石流、がけくずれが起こり、大鹿村では山津波が集落を直撃し、目の前にそびえる大西山が崩れ落ち、たくさんの死者やけが人を出した。	 <p>天竜川通信 vol.10</p>
か	かすみでい 霞提 さくら そ 桜に染まり とど はる 届く春	霞提には昔出水時に「木流し」に使っていた桜が多く植えられており、今ではその桜が春を届けてくれている。	 <p>天竜川通信 vol.14</p>
き	きょうくんい 教訓生かし はや ひなん 早めの避難を こころがけ	これまでの災害教訓を生かして災害時には早めの避難をこころがけなくてはならない。	 <p>具満タン DX</p>
<	くじゅうくたに 九十九谷 けっして ひやく 百まで かぞ で数えない さいがいよぼう 災害予防の い った 言い伝え	九十九谷は誰が教えたか、いつ頃からか、ここには谷が九十九あるのだと伝えられている。だが今正しく数えたら百あるかもしれないが、それを百と数えない。百ありそうだったら二本の指をおってでも九十九と数えなければならない。もし百と数えたら最後、それこそ鬼が出るか、蛇が出るか、村中踏み荒らされてしまうと言う。九十九谷がまた百谷あったころ、その谷底に鬼が住んでいて、大荒れしてその中の一谷が埋まって九十九谷となった時、鬼はいる場所が無くなって逃げ出した。	 <p>信州の治山 2007 p.26</p>





五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
け	<small>けいほう</small> 警報が <small>な</small> 鳴るまで <small>ま</small> 待たずに <small>じしゅひなん</small> 自主避難	<p>これまでの災害伝承や教訓から大雨洪水警報などの発令前に自主避難して助かった例がある。特に避難遅れによる被災では、「自分だけは大丈夫」といったバイアス効果が働くとも言われるので、避難の決定は人任せにせず「自助」の考えが重要である。</p>	 <p>具満タン DX</p>
こ	<small>こうじんやま</small> 荒神山 <small>てんりゅう</small> 「天竜」 <small>う</small> 生んだ <small>そうせいでんせつ</small> 創生伝説	<p>辰野縁起によると、信濃の山の重なりの中に信濃神二湖（しなのかむいのにこ）と呼ばれる青く澄んだ二つの湖が、一筋に入り江に結ばれて並んでいた。古くから湖の底には魔の神が住み、洪水をきたした。七月七日竜は天に去り、今までの湖の底だったところに野はひらけ、神の怒りに触れることなく嵐に襲われることもなくなった。この時から、竜の住んだ野「竜野」といい、流れる川を「天竜」というようになった。今も荒神山の北の岡の松とすすきの茂る中に、梨恵が竜の昇天を見た跡が秘められているという。</p>	 <p>てんりゅうくん オリジナルデータ</p>
さ	<small>さんよりこより</small> <small>みこしかついで</small> <small>たいがん</small> 対岸へ	<p>「さんよりこより」という祭りは境内横の広場中央で「鬼＝荒神」役の大人が二人、太鼓を打ち鳴らす。その周りを、飾り竹を持った子どもたちが「さんよりこより」と唱えながら、鬼の周りをぐるぐる回り、鬼が太鼓をたたくと、子どもたちは手にした飾り竹で鬼を滅多打ちにする。これが三回繰り返される。この後、大人たちがご神体を乗せたみこしを担いで三峰川を渡り、桜井の天白社で同じ「さんよりこより」を行う。子どもたちの唱える「さんよりこより」は、「さあーよってこいよおー」の意味がある。鬼をたたくのは、洪水を起こす疫病神（鬼）をたたきつぶし、洪水を鎮める神事とされ、古くから暴れ川・三峰川の水害に悩んできた住民の思いが伺える。また、みこしが三峰川を渡るのは、年に一度、対岸の妃の神のもとへ逢いに行くためだと言われ、「その日は絶対に三峰川は荒れない」とも言われている。</p>	 <p>伊那市観光ガイド HP http://ina-kankou.city.ina.nagano.jp/contents/details/sanyori.html</p>

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
し	しとく さいがい 四徳の災害 むらびと 村人たちの しゅうだんいてん 集団移転	中川村(旧南向村)にある四徳は昭和 36 年まで川の上流に約 90 戸の四徳集落があった。しかし 36 災害の際に濁流が 60 数戸の家屋を飲み込み、死者と行方不明者は 7 を数えた。これによって四徳は、集落として 400 年余りの歴史に幕を閉じて、集団移住をした経過がある。	 天竜川サイエンス p.21
す	すいじん 水神さま みまも ぼしよ 見守る場所に みず りやく 水のご利益	水神さまは、飲み水や農業など生活に使われる水を守る神様、水害から地域の人々を守る神様などいろいろな形でお祭りされている。	 三峰川堤 現地写真
せ	せおとちか 瀬音近づき ひなん けつだん 避難の決断 すく いのちを救う	昭和 58 年災害の折、三峰川上流の旧長谷村で旅行客の救出に当たった方の教訓より記載。	 現地写真
そ	それまでの じんち こ 人智を超えた さいがい 36災害	伊那谷における 36 災害での死者は 130 人（行方不明 29 人をふくむ）、家屋全壊 516 戸、家屋流出 380 戸、浸水戸数 1 万 2 千 452 戸、被害額 250 億円と、日本の土砂災害史上に残る大惨事となった。	 事業案内 p.4
た	たかとう 高遠の みぶ いか 三峰の怒りと さくら やさ 桜の優しさ	旧高遠町は高遠城の桜が江戸時代より有名であり人々に癒しを与える。その一方で三峰川は水害の常龍地帯で高遠の人々に牙をむくことを読んだもの。	 上伊那川たんけんブック p.66


五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
ち	ち さくら 散りゆく桜 なつ まま 夏を待つ間に つ ゆ ぞうすい 梅雨の増水	桜が散って夏を待つ前に梅雨の時期になり、天竜川が増水してしまうことを読んだもの。	 <p data-bbox="1235 613 1394 645">具満タン DX</p>
つ	つつみ さくら 堤の桜 いま のこ 今に残る すいぼう ねが 水防の願い	昔、三峰川の青島地区付近では桜が多く植えられていた。この地域は山が遠いということもあり、洪水による出水時には木を切って「木流し」に使っていた。	 <p data-bbox="1098 1032 1493 1144">天竜川上流河川事務所 HP (http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/index.html)</p>
て	てんりゅう 天竜びと れきし おも 歴史と思いを かた つ 語り継ぐ	「天竜びと」とは、天竜川流域に暮らす人々、天竜川をこよなく愛する人々のこと。現在、天竜川上流河川事務所が発行する「天竜川通信（定期）」で天竜びとに思いを語り継いでもらっている。	 <p data-bbox="1235 1487 1394 1518">具満タン DX</p>
と	とものていぼう 伴野堤防 いち はね 一の勿 さい だいひがい 36災の大被害	36 災害の際に、豊丘町伴野地区で伴野堤防が決壊して大被害をもたらしたことを読んでいる。	 <p data-bbox="1098 1850 1493 2040">語り継ぐ天竜 27 紙芝居 開墾堤防 (http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/publication/pbl_tell/pdf/27.pdf)</p>




五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
な	<small>なかがわ</small> 中川の <small>れきし みまも</small> 歴史を見守る <small>じょうせんじ</small> 常泉寺	常泉寺は今から五百年以上前に開基されたと伝えられており、伊那七福神の1つ大黒天が奉られている。また「石神の松」「行者さま」など天竜川にまつわる伝承を残しており、500年以上も前から中川の歴史を見守っている。	 <p>第1回現地見学会資料</p>
に	<small>にんげん</small> 人間に <small>おんけい</small> 恩恵もたらず <small>しぜん きょうい</small> 自然の脅威	災害は地域社会や住民に多くの被害を生じさせるが、例えば洪水により氾濫して堆積した土砂は上流からの腐葉土を運び、畑作や稲作に栄養を与える。	 <p>天竜川サイエンス p.15</p>
ぬ	<small>ぬしば</small> 主化けた <small>むすめ む</small> 娘が向かう <small>ふか いけ</small> 深みの池	「深見の池伝説」によれば川路の見鞍の池を埋め立てて新田を作ることになったころ、この地では見られない美しい娘がひとり深見の里に手伝いにやってきた。娘は三日目に行方不明となり、その後しばらくして竜神となって現れた。	 <p>オリジナルデータ</p>
ね	<small>ねむ</small> 眠らずに <small>つく ど</small> 作った土のう <small>いちまんはっせん</small> 一万八千	平成18年7月の豪雨災害の際に土のう1万8千個を作って、水防のため応急措置を行った辰野町での事例。	 <p>土のう作り</p> <p>京浜河川事務所 HP http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/topics/h18/005/index.htm</p>

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
の	<small>のそこがわ</small> 野底川 <small>いま わす</small> 今も忘れぬ <small>だいはんらん</small> 大氾濫 <small>さいがい</small> 36災害の <small>もうい おも</small> 猛威を思う	<p>野底川は、飯田市街地の北側と上郷との境を流れている小川で、いつもは橋がなくても渡ることできるほどの浅瀬だった。しかし、36 災害の集中豪雨から山崩れ・鉄砲水となると水に勢いがつき、川筋から大きくそれて上郷別府一带に襲いかかった。現在野底川の道沿いにある夜泣石というのも、このとき上流から流れてきた石である。</p>	 <p>WEB SITE 信州・長野県公式 HP (http://www.pref.nagano.jp/doboku/sabo/monument/yonaki.htm)</p>
は	<small>は せ さと</small> 長谷の里 <small>みわ こ かた</small> 美和湖が語る <small>ちすい れきし</small> 治水の歴史	<p>度重なる洪水は崩落の激しい三峰川上流部の土砂を美和湖に流入させ、深刻な堆砂をもたらした。昭和 34 年に完成した美和ダムでは、美和湖を観光資源に、またダムは治水、かんがい、発電の機能を維持、増進するために堆砂対策の工事が継続的に行われている。</p>	 <p>南アルプス NET (http://www.minamialps-net.jp/data/article/684.html)</p>
ひ	<small>ひなんご</small> 避難後も <small>みまわ あんぜん</small> 見回り安全 <small>ちいき</small> 地域のちから	<p>避難した後も地域の見回りを行うことにより、更なる被害が出ないように地域ぐるみで取り組んだ。旧高遠町松倉地区では伊那警察署が災害時に活躍した。</p>	 <p>具満タン DX</p>
ふ	<small>ふだん</small> 普段から <small>こころ</small> 心がけよう <small>きんじょ</small> 近所づきあい	<p>普段から近所づきあいを行うことが、災害時の地域防災力の底上げになる。このことを「共助」の重要性とも言うことができる。</p>	 <p>具満タン DX</p>

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
へ	へんか 変化する しぜん まな 自然に学ぶ せんじん ちえ 先人の知恵	災害時の変化する自然条件に対して経験のある先人の知恵や知識を今後とも傳承していく必要がある。	
ほ	ぶね ほかけ船 てんりゅうがわ 天竜川を おうらい 往来し いま むかし 今は昔の おもいでばなし 思出話に	天竜川の東と西の人々が行き来をしたり、荷物を運ぶため、昔からほかけ船が使われてきた。天竜川に橋がかかるのは明治時代以降のことで、それまで人々にとっては舟運がたよりだった。昔の天竜川は激流で、船を操作するのも命がけだったことだろう。	 <p>上伊那川たんけんブック p. 53</p>
ま	まいぼつりん 埋没林 むかし ようす 昔の様子を かた つ 語り継ぐ	文字どおり“埋もれた林”のことで、林が埋もれる原因には、河川の氾濫による土砂の堆積、地すべり、海面上昇などさまざまなものがある。最近、旧南信濃村では池厚くずれで池や川をせき止めた土砂に埋もれていた巨木たちが川底から頭を出してきた。その埋没林を調べてみると、その森林が生育していた過去の災害環境を推定する大きな手がかりとなる。	 <p>遠山川の埋没林 表紙</p>
み	みなと まち 湊の町に ごうう き 豪雨と来たる どせきりゅう 土石流	平成18年7月豪雨で岡谷市湊地区では7名もの方々が亡くなるほどの規模で、悲惨な土石流がおこった。	 <p>消防科学総合センター (http://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=IB17&ac2=87winter&ac3=4697&Page=hpd_view)</p>

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
む	<small>むかし</small> 昔より <small>りゅう</small> 竜がおさめる <small>てんりゅうがわ</small> 天竜川	天竜川の名前の由来は川の流れ出る諏訪湖の近くにある諏訪神社に祭られている竜神からきているという説があり、昔より竜がおさめる川と言われている。また、天竜は「天流」「天龍」など歴史的な用語の変遷も興味深い。	 <p>天竜川上流河川事務所 HP (http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/tenryu.html#02)</p>
め	<small>め</small> 目をこらし <small>みみ</small> 耳をすませて <small>し よちよう</small> 知る予兆	災害が起こる前には何かしらの予兆があるので、それを見逃さないように感覚を鋭くする必要がある。	 <p>具満タン DX</p>
も	「もうだめだ」 <small>まえ</small> あきらめる前に <small>こえだ</small> 声出して	災害に遭遇してしまい「もうだめだ」と思うときもまず声を出して周りの人に知らせることが大切である。	 <p>具満タン DX</p>
や	<small>やみ なか</small> 闇の中 <small>きけん</small> 危険を <small>し</small> 知らせる <small>はんしょう おと</small> 半鐘の音	災害時や火災の時に半鐘は周囲の人々に非常体制を告げる音であった。今はその音も消えつつある。	 <p>消防博物館 写真</p>
ゆ	<small>ゆるがない</small> <small>おも こ</small> 思いを込めた <small>そうへ いていぼう</small> 惣兵衛堤防	市田、座光寺、上郷の段丘の下の田畑があった所は、毎年のように天竜川が氾濫して幾たびも大きな被害を受けていた。飯田藩主の堀親長は、万匠町に住む有名な石工の中村惣兵衛に堤防を作るように命じた。惣兵衛は1750年に築堤工事にとりかかり、1752年、当時としては驚くべき速さで完成させた。	 <p>惣兵衛堤防 下伊那川たんけんブック p. 66</p>

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
よ	よだぎ 与田切りに ひばなち 火花散らして なが おおいわ 流れる大岩	天竜川支川の与田切川流域では百間の山肌が大きく崩れ、土石流が頻発している。その土石流は岩と岩がぶつかりあい、夜に発生するとまるで花火のように夜空に光ってうつる。	 <p>上伊那川たんけんブック p. 61</p>
ら	らいちよう 雷鳥の い さんちよう 出ずる山頂 こうてん 荒天で さとがわ みずかさ 里川の水嵩 しゅんじ ぞうすい 瞬時の増水	夏の不安定な天候は中央アルプスの山岳地では急変し突然の降雨を発生させる。晴れている天竜川の支川では一瞬に水位が上昇し危険な状況になるので注意が必要である。	 <p>WEB SITE 信州・長野県公式 HP http://www.pref.nagano.jp/soumu/koho/symbol/symbol.htm</p>
り	りゅうさい 竜西に めぐ 恵みをもたらす いすい ようすい 井水と用水	竜西一貫水路は食料増産のために作られた、中川村葛島の南向発電所から放水された水が、サイホンで天竜川の下をくぐって竜丘や川路の段丘の上まで運ばれている。田植えのころになるとあふれるほどの水をたたえて竜西をうるおしている。	 <p>下伊那川たんけんブック p. 49</p>
る	であら るり寺の あまご かみ 雨乞いの神 あお がしら 青じし頭	高森町のるり寺には雨乞いの神として「青じし頭」が奉納されており、この青じしを外に出すと雨が降ると言われている。	 <p>オリジナルデータ</p>

五音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
れ	<small>れんけい</small> 連携を <small>さいゆうせん</small> 最優先に <small>ぼうさいかつどう</small> 防災活動	<p>どの町にも住民によって水防団が作られており、洪水を警戒したり、土のうを作って浸水を食い止めたり、地域住民で連携して防災活動を行っている。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p. 73</p>
ろ	<small>ろうりよく</small> 労力を <small>つい おこな</small> 費やし行った <small>ぼうさいかつどう</small> 防災活動	<p>昔の人々は洪水から町や村を守るために共同で命をかけて河川工事を行った。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p. 65</p>
わ	<small>わす</small> 忘れるな <small>ひ さいがひ</small> あの日の災害 いつまでも	<p>過去の災害をいつまでも忘れないように伝承していくことが必要である。</p>	 <p>具満タン DX・事業案内 p.4</p>

【災害教訓伝承カルタの分布位置】

災害教訓伝承カルタで取り扱う内容について、「災害教訓」などの場所が特定されないものを除いて、その他の内容に関する地域を地図にプロットした。その図を事項に示す。

カルタの内容は、天竜川流域全体に及んでいるが、特に上伊那・下伊那地域の関わるものが多い。

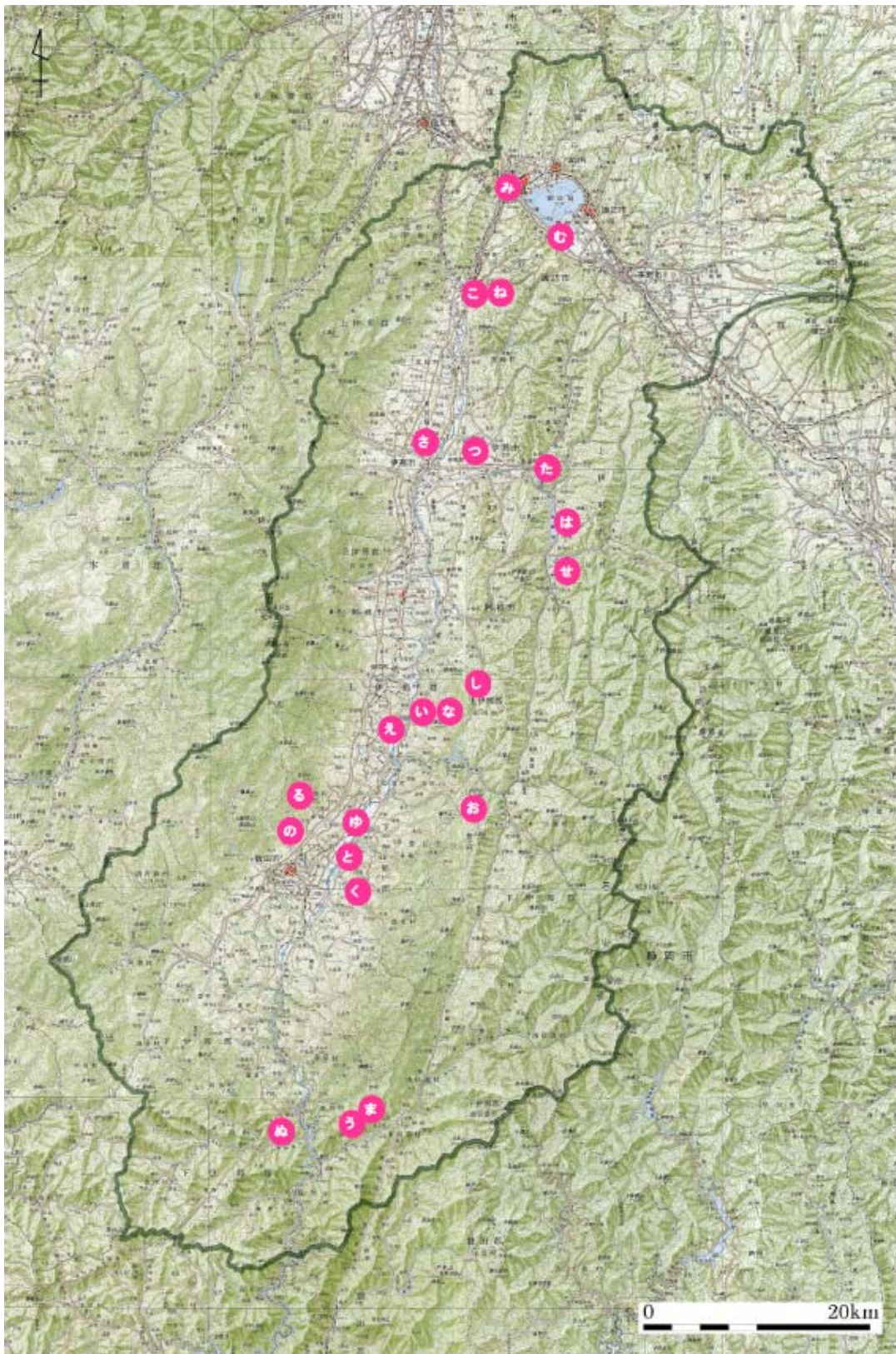


図 5-1 事象位置図

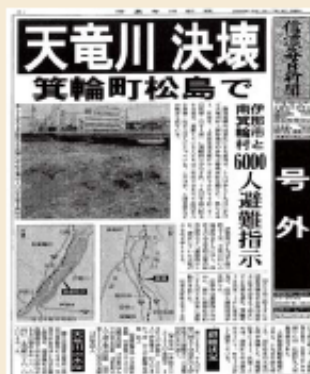
② 災害伝承パネル

天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会

○天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会とは？

天竜川上流域には過去の災害にまつわる歴史資料、石碑・遺構、民間伝承が非常に多く残っています。しかし災害を経験したことにより得た教訓（知恵、知識）が十分に活かされていない現状があります。

そこで、災害に備えるための教訓をどのようにして後世に語りついでいくのかを考えるために信州大学人文学部の笹本教授を座長とし、大学や博物館の有識者、自治体や防災関係団体などのメンバーからなる委員会を設置しました。昨年度から2年間にわたり全4回の検討会を行っています。今年度はいくつかの地域を対象に災害教訓を伝承するための取り組みを試行的に行っています。



平成 18 年 7 月豪雨災害を伝える新聞
H18.7.19 信濃毎日新聞

○災害教訓伝承手法検討会の様子を伝える新聞



H20.10.1 信濃毎日新聞



H20.10.1 長野日報

○お願い

「災害教訓伝承手法検討会」では、天竜川上流域に関する過去に起こった災害の記録や地域に伝わる災害伝承を収集、整理して地域防災力の向上に役立てる試みを行っております。ご自宅で保管されているような貴重な資料がありましたら下記連絡先までお知らせ下さい。

〈連絡先〉国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
担当：調査課（電話番号：0265-81-6415）

天竜川上流域の災害の歴史

●平成18年災害

2006(平成18)年7月15日から降り始めた雨は21日まで降り続き、各地に被害が続出しました。浸水面積は約558ha、被害家屋は、床上浸水1,076棟、床下浸水1,465棟の合わせて2,541棟にも及ぶ被害となりました。天竜川本川では、田畑等の浸水被害が12地区で発生し殿島橋が落橋した他、箕輪町松島地区で堤防が決壊するなど、飯田市から箕輪町まで広範囲に被害が及びました。

天竜川各地の被害状況

伊那市 中央橋 (7/19)

箕輪町松島地区

阿谷市湊

赤羽中山

伊那市 殿島橋 (7/20)

高森町 カヌー親水公園 (7/19)

飯田市川路 かわらんべ前 (7/19)

(平常時)

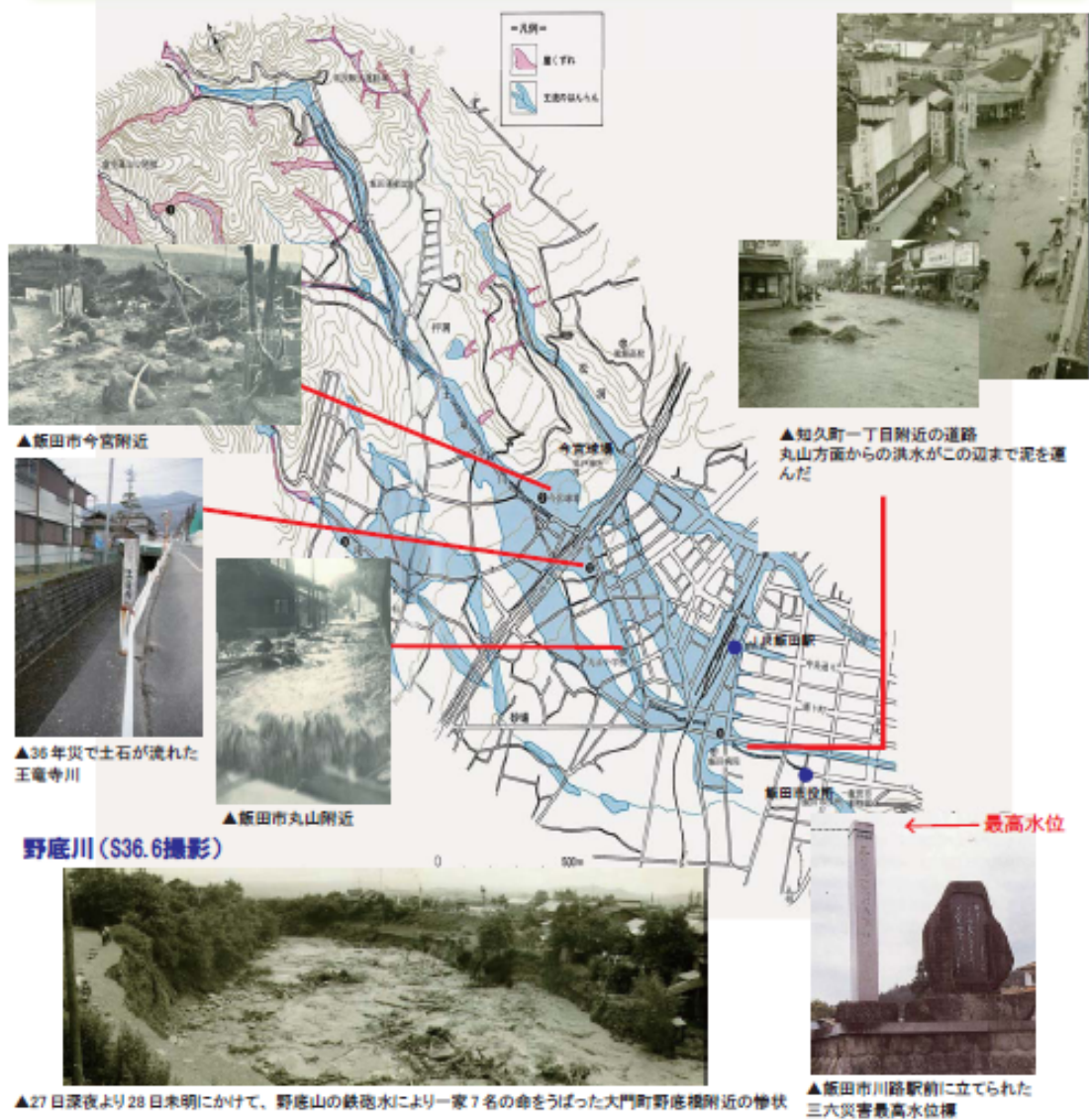
天竜川の災害
 ▲ 河川橋梁の損傷 (河川橋梁の損傷している水害)
 ▲ 河川橋梁の損傷 (河川の敷設が壊れる水害)
 ▲ 河川橋梁の損傷 (河川の敷設が壊れる水害)
 ▲ 河川橋梁の損傷 (河川の敷設が壊れる水害)
 ▲ 河川橋梁の損傷 (河川の敷設が壊れる水害)

天竜川上流域の災害の歴史

●三六災害

1961(昭和36)年6月、台風の接近と梅雨前線の停滞により、伊那谷では1週間で年間平均雨量の3割を超える豪雨(飯田観測所:総雨量579mm)を記録、各地で土砂災害が発生しました。

ふり始めからの総雨量が500mmをこえた飯田市下伊那地方の山間部では土石流が多発、天竜川本流でも堤防が決壊して、人家や耕地をおそいました。死者・行方不明者130名の日本の土砂災害史上に残る大惨事となりました。



「伊那谷の土石流と洪水」伊那谷自然友の会・飯田市美術館発行／
「36年6月梅雨前線集中豪雨災害記録」長野県下伊那地方事務所発行 より

天竜川上流河川事務所

天竜川上流域の災害の歴史

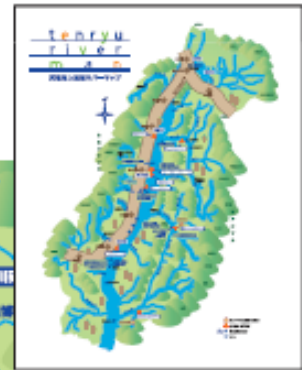
●五八災害

1983（昭和58）年9月20日にグアム島の南で発生した台風10号により、本州南岸沿いに停滞していた秋雨前線が刺激され、天竜川上流域で9月27日から28日にかけて大雨になりました。総雨量は200～400mmにおよび、天竜川の流量は戦後最大を記録しました。下伊那地方の被害は、死者3人、負傷者12人、被災住家933棟におよび、三六災害と並ぶ大災害となりました。

旧上郷町の土砂災害 (飯田市上郷)



上郷町野底林道 土石流により林道決壊



竜江の洪水災害



▲飯田市竜江御座 S58.9.29
天竜川の氾濫により桑畑、水田浸水

川路の洪水災害



▲飯田市川路天竜峡 床上浸水（天竜峡ホテル）



▲飯田市川路天竜峡 S58.9.29 床上浸水

天竜川の災害と教訓

伝えたい災害とお話 ～飯田～

●羽場崎 のりともさん(飯田市在住)

長年地域の水防活動に取り組んできた竜水開発組合長



「昭和36年災害・58災害」について

Q. 雨の降り方やまわりの状況はどんな様子でしたか？

ドーンと降ってそれからパツと止んじゃったみたいな形で本当に実際にここまで水についたのは、2時間が3時間だったと思いますね。

Q. 災害に直面した時、どんな行動をされましたか？

「向こう三軒隣組」、それがやっぱり一番役にたつていうか、「あそこのおばさんが来とらんじゃないか、まだ家にいるんじゃないか」と、そういう心配で水がついとも行ってみてる。

Q. 災害を経験して、どんなことを思いましたか？

目の裏に焼きつくと、自然災害の恐ろしさというものを目の当たりにして、自然には勝てないと、なんとかこれからは行政の面でも力を入れて守っていかなきゃならんというようなことを強く感じた。

Q. 災害に強い地域への取り組みには、どんなことが必要ですか？

地域全体で雨の降り方、そういったものもある程度情報源を持っておるといこと。



36災害当時の伊賀良の様子(昭和36年6月)

●平沢 清さん(飯田市勤務)

36年災当時、飯田市下久堅に在住、H18年災では長野県職員として復旧に従事



「昭和36年災害」について

Q. 雨の降り方はどんな様子でしたか？

ほぼ1週間ぐらいシトシトシトと雨降りが続いた後、大きな雨がどつときた、という印象がありました。

Q. 天竜川はどんな様子でしたか？

天竜川沿いにあった工場の家が、水がついてくることによって浮きまして、徐々に本流の方へ導かれて、天竜川にかかっております水神橋に激突してこっぴみじんになるという状況を見て、「これは恐ろしい」という感覚をうけました。

Q. 天竜川やまわりの様子を見て、どんなことを思いましたか？

天竜川の中を大きな石が流れるなかで、石と石がぶつかって火花が散るとかですね、ゴトンゴトンというなんともいえない地響きをたてるような音とかですね、夜昼なしに恐ろしさを感じました。

Q. 災害後、どんな行動をされましたか？

泥出しですね、今でいうボランティアとして学校で先生ともども出かけました。水だけだったようなところについては、倒れた稲をあげることによって田んぼがなんとか復活するということで歩いた記憶がある。

Q. 災害を経験して、どんなことを思いましたか？

36災害を通じて、ああゆう災害が少しでも減らすことができばという思いから、こういう職場に入ったかもしれないです。行政側だけでなく住民の皆さんも巻き込んだ、そういう意識をいかに持ち続けるのが大事なという、今後やってかなきゃいけない。

災害にまつわる言い伝えと民話



子泣き石

それはなむ、いまから二百十余年もめえのなむ、正徳五年の未満水のときだつちゆうに。天地かいびやくこのかたの大水が出てなむ、あつちべた、こつちべたの山がくずれてなむ、そいつが一度にどつと天竜川におし出したんだつてな。(略) それ。そこんどこにどでかい石があるずら。あれもそのときになむ、上の方からころんころんと流れてきたんだつちゆうに。

それからこの大石のそばを通るとなむ、赤んぼうの泣き声が聞こえるんだつて、かわいそうに、赤んぼうが流れて来たその大石の下になつて死んでつからだつちゆうに。

赤んぼうの悲しそうな泣き声がするもんで、近所のしゆうが、石の上にお地藏さまをまつつてやったら、泣き声がピツタリやんじやつたつて。

ほうら、お地藏さまに、よだれかけがいくつも掛けたるずら、あれはなむ、赤んぼうの夜泣きや病気をなおしてもらつたお礼にあげたものだに。

伊那谷の伝説
「天竜川のカワランベ」より



野底川から運ばれてきた子泣き石 (飯田市上郷別府)

災害伝承カルテNo.130

<位置図>



人柱

昔、南信濃の天竜川に長い橋が架かっていて。毎年毎年大水で流されてしまうので、村中の人が集まって対策を話し合っていた。ひとりの男が人柱の話をしたところ、その男は最初に言い出したという理由で人柱にされてしまった。

男の息子は悲しがり、父は矢作の人柱 キジも鳴かすば撃たれまい、と詠んだ紙を父が埋められている柱に貼り付けた。村の人たちのためになつたが、父が余計なことを喋つたためにこんなめに遭わねばならなかつたと悔やんでいる息子の姿をみて村人は、橋を渡る際に息子の歌を思い出し、死んだ男のおかげで安心して渡れることをあらがたがったという。

③ 災害おはなしマップ

・伊那市に伝わる災害おはなしマップ

○伊那市に伝わることわざあれこれ○

- 北風が吹くと大水がでる（東春近）
- 西胸へ雲が出ると近いうちに雨（長谷）
- 土にかけるとスガシ（地味）がホにかけると、台風が来ない年。
- 蜂の巣が低い場所にある年は大風が吹く
- 夕焼けは晴、朝焼けは雨
- 樹上で青蛙が鳴くと雨
- みみずが地面を這うは雨
- 水こいの鳥が鳴くと雨が降る
- 禰（ふんどし）が下がれば雨が降る
- 夕方子供が騒げば雨が降る
- 川下で瀬作りがすると雨が降る
- 雷の鳴る時「奈原、奈原」と鳴えんと落ちない
- 火の夢は水出、水の夢は火事がある
- 猫が耳を越して顔を洗うと雨

伊那市に伝わる 災害おはなしマップ



天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会

伊那市に伝わる災害 おはなしマップ



★ 伊那市に残る災害にまつわるおはなし・・・1～4ページ
● 水害にまつわる石碑や指標・お祭り・・・5～6ページ

●天竜川のおはなし

天竜川は、昔から大雨が降ると川筋が変わるほどに氾濫したので、「あばれ天竜」といって恐れられていました。また、伝説も多く残されています。

むかし南の海に住んでいた大きな竜は、暴れんぼうで気性が荒く、仏様に天の果へと追いやられてしまいました。竜は、天に昇ってから雲や風をけちらし、強そうにそびえる八ヶ岳にけんかをしかけました。ぐるぐる山に巻きつき締めつけたので、こらえきれなくなった八ヶ岳はどかんと噴火しました。その勢いで竜は吹き飛ばされ、伊那の山々の間にどっさりと落ちました。その跡に川が流れ、天竜川と呼ばれるようになったといわれています。

むかしのおはなしは、川がときに恐ろしい姿に変わり、襲いかかってくることを教えてくれています。

★ 天竜川の川筋の変遷 (伊那市 伊那大橋を中心に)

(「伊那市史 歴史編、図4・17、pp.1134」に加筆)

しっかりとした堤防や護岸が出来る前の天竜川は、洪水の度に本流が蛇行し、今と違うところを流れていました。江戸時代の古文書に見られる記録や古老のはなし、川の流れる地形や淵(水が淀んで深いところ)の跡などから推定した川筋の変遷が、「伊那市史」に書かれています。

江戸時代の元禄以前の川筋は、今よりも東側の段丘沿いに流れ、大橋のあたりから西よりに流れていました。(①)

元禄から文化頃までは、伊那市の御園地区に残る水神碑のあたりから天竜川の本流が西側に切れ込み、大橋のあたりから東よりに流れていました。(②③)

江戸時代の終わり頃、長い間水害を受けてきた山寺村の願いが高遠藩に聞き入れられ、萩島から北清水・荒なぎに向かって本流を入れる堤防がつくられました。(④)

★ あばれ天竜にまつわる村争い (伊那市 大橋あたり)

むかしの天竜川は、「あばれ天竜」といわれ、江戸時代の約270年間に90回ほどの水害を繰り返してきました。あばれ天竜は、人々が一生懸命に耕した田畑や家を呑み込み、川を挟んだ村々の境界を変えてしまうので、村同士の争いがおこりました。むかしの人々にとって、あばれ天竜は生活の糧を奪ってしまう存在であり、守ることに必死だった姿を思い浮かべることができます。

「島」というと海や湖の中にある島を思い浮かべますが、海と無縁の伊那市にも「島」のつく地名が多く残されています。これらは、川に沿った場所につけられている特長があります。「萩島」「萩島川」「中島」などは、江戸時代の天竜川の川筋に沿って残されています。

★ 見返し桜 (伊那市 狐島)

むかし、延享元年(1744年)の大洪水で、村境であった「桜島」が流失してしまいました。これをきっかけに、狐島村と西町村・荒井村との村境の絵図が作製され、後の洪水による境界争いの判断の基本とされました。見返し桜は、境界を定める基準点のひとつとして絵図に記されており、二代目の桜が今も大切に守られています。

下の歌は、江戸時代の終わり頃に氾濫する天竜川をはさんでおこった、五か村の水争いを、たくみに織り込んでつくられた狂歌です。さて、争った村とは、どこの村だったのでしょうか？ 左上の地図を見て、五つ考えてね。

ふるぎつね、山寺下を海にして あら恐ろしや、いま出て見れば
(西えは、7ページにあります。)

★ 赤河原の大蛇 (伊那市長谷黒河内)

むかし、長谷の山奥を流れる戸台川の上流に七色のうろこを持つ大きな大蛇がすんでいました。大蛇はときどき里におりてきては悪さをするので、人々に恐れられていました。

あるとき、ヤマトタケルが、東国の悪者征伐から帰る途中、東駒ヶ岳を越えて入野谷へと入ってきました。そこで、この悪い大蛇の話を聞いたヤマトタケルは、戸台川の河原で大蛇を見つけると自慢の太刀をふりあげました。

大蛇は、七色の輝きを放ちながら大きなくろを巻いて、ヤマトタケルを一飲みこしようと襲いかかりました。大乱闘の末、体を切りつけられた大蛇は、苦しさのあまりに広い河原をのたうちまわりました。

そのとき、大きなうろこが空高く飛び散り、大空にキラキラと虹を輝かせながら南アルプスの深い谷の中へと散り散りに落ちていきました。

そして、とうとう大蛇は息が絶えてしまい、あたりの河原は噴き出した大蛇の血潮で、燃えるような赤色に染まっていました。

ヤマトタケルは、退治した大蛇の頭をたずさえて、満口の里まで降りてくると、大きな葉の木のそばに大蛇の頭を埋めて、人々を苦しみから救いました。その後里の人々は、尾張の国から熱田神宮(現在の名古屋屋熱田区)をおむかえて、ヤマトタケルをお祀りしたということです。

ヤマトタケルが大蛇を退治した河原付近の石はどれも赤い色をしていて、そのあたりは、今も「赤河原」という地名が残されています。また、三峰川には、七色に輝くきれいな珍しい石があり、人々から「三峰川の七石」と呼ばれています。

★ おや子石 (伊那市高遠町御堂垣外)

ずうっとむかしのことだ。大じしんでな、地山がくずれて、ドドドーっと土砂が、おしだしたと。地山には、おや子の山犬がすんどったが、おったまけて逃げだしたとき、さきに母犬が、小犬をつれてな。あとから追いかけてきた父犬は、ワン、ワン、ほえながら逃げていった。が、御堂垣外まできた時に、藤沢の蛇ぬけにおしながされて、石になってしまった。母犬と小犬は、キャン、キャン、なきながら、どんどん逃げた。けれども、おっかなくて、せつなくて、とうとう中家でな、べったりすわりこんだまま、二つの石になったとき、それだもんで、父犬の石を「犬石」といい、母犬と小犬の石を「子つれ石」とよんだそう。

それから、「地山おしだす、犬石ほえる。ないてにげるは、子つれ石。」とうたわれるようになったとき、それらの石は、今はない。通ふしんにでもつかわれてしまったのかな。(「天竜川の災害伝説、伊那の民話・信濃の民話」より)


大量の水を呑んだ土砂が一気に流れ下る「土石流」を「蛇抜け」といったりします。「おや子石」のおはなしは、地震で山崩れがおこった後に、大雨などが引き金となって「蛇抜け」が襲ってくる危険性があることを私たちに教えてくれています。


★ 経塚 (伊那市東春近六軒塚)


荒れ狂う水の勢いを目のあたりにして、川が静まるよう、人々は繰り返し祈りました。三峰川を見下ろす段丘のふちに、「経塚」と呼ばれる古墳があります。文化六年(1809年)に三峰川が大洪水になり、上殿島地籍は大きな被害を受けました。その際、人々が水難除けの大般若経を転読し祈禱を行い、この場所に経文を埋めたといわれています。


洪水を鎮めるために祀られた水神碑やお祭り、水との関りの歴史や出水の指標など、昔の水害を今に伝えてくれる場所が、伊那市にはたくさんあるよ！


水害にまつわる石碑や出水の指標・お祭り


1 福島九頭龍神 (伊那市福島)
堤防裏肩に設置されている九頭龍神です。九頭龍は、戸隠神社の水の神様で、江戸時代の頃には、治水工事の前線に建てられました。

(「三十年のあゆみ」より)

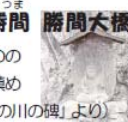
2 柵立ての碑 (伊那市野底)
洪水の惨状から美田を守るため、高遠藩の郡代「坂本天山」は、数万人の労力と莫大な費用をかけ、自ら指揮をとってこの地に柵立堤防を築きました。



3 双葉神社 (伊那市御園)
当初、天竜川と大清水川の合流点の堤防にあった一本杉のたもとに水神として祀られていました。その後護岸工事に伴い移転し、社殿が建設されました。


4 山寺の水波能売神 (伊那市山寺)
「水波能売神」は、日本神話に登場する水の神様です。イザナミが火の神様を生んで火傷し、苦しんでいた尿から、五穀・蚕桑の神とともに生まれました。


5 天龍川改修記念碑 (伊那市東春近田原)
昭和22年6月天竜川が直轄編入され、最初に着手されたところに建てられた記念碑である。
(「三十年のあゆみ」より)


6 さんよりこより (伊那市美簾川手・富県桜井)
「さんよりこより」とは、洪水をおこす厄病神を叩き潰すかけ声です。昔の洪水で、順に流れついたら天伯様を御輿に担ぎ、三峰川を歩いて渡ります。


7 波切り不動明王像 (伊那市高遠町勝間 勝間大橋)
三峰川沿岸は梅雨に、台風にも、いつも洪水におのいてきた。そこで、勝間の村人は、水の脅威を鎮めてもらおうと不動明王に登場願った。
(「天龍川の川の碑」より)


8 高遠弁財天 (伊那市高遠町 弁財天橋)
河中の天然石の上に祀られている弁天様。過去の幾多の洪水にも流されたことがないという。岩は自然の量水漂のやくめもしてきた。
(「三十年のあゆみ」より)


9 米高岩 (伊那市高遠町多町 天女橋)
天女橋の下にある。三峰川の水がその岩に当たって流れる年は、お米の値段が高いという。
(「長野県上伊那誌5 民俗篇上」より)

むかしから語り継がれてきた災害のおはなしには、災害から身を守る知恵や「二度と悲しい思いをしてほしくない」という人々の願いが込められているよ！もっとくわしく知ってみよう！

- まずは、家族や地域の人に聞いてみよう！
- 図書館で市町村誌や本を調べてみよう！
- おはなしにまつわる場所に行ってみよう！

学習施設や災害の記録に関する本

- 砂防情報センター
(<http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/kouhou.html>)
- 語り継ぐ天竜川シリーズ
天竜川流域の災害・環境・歴史・文化などをテーマに執筆され、現在全61巻。天竜川上流河川事務所のホームページからダウンロードすることができます。
(http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/publication/pbl_tell/pbl_tell.html)
- 長野県災害体験集
(<http://www.pref.nagano.jp/kikkai/bosai/taiken/hm/index.html>)
- 「上伊那川たんけんブック 天竜川とわたしたちのくらし」
(平成18年5月1日発行)
編集：上伊那川たんけんブック編集委員会、上伊那教育会郷土館部専門委員会
企画・発行：国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所

古町村・福島村・山寺村・荒井村・西町村の5つだよ！「ふるぎつね」は古町村・福島村の百姓たちのこと、山寺下は大橋の西側あたりのこと。山寺村だんだ、「あら」は荒井村、「いま」が当時の西町村にあった伊那郡宿のことで、天竜川の洪水を高見の尾筋ができた場所なんだよ。

クイズの答え

参考文献

- 「天竜川の災害伝説」 (平成5年3月19日発行)
著者：笹本正治 企画・発行：建設省中部地方建設局天竜川上流河川事務所
- 「天竜川の川の碑」 (平成20年発行)
著者：竹入弘元 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所
- 「伊那市史 歴史編」 (昭和59年9月27日発行)
編集：伊那市史編集委員会 発行：伊那市史刊行会
- 「長野県上伊那誌5 民俗篇上」 (昭和55年1月15日発行)
著者：上伊那誌編集会 発行：上伊那誌刊行会
- 「三十年のあゆみ」 (昭和55年3月発行)
発行：建設省中部地方建設局天竜川上流河川事務所

お願い

天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会では、天竜川上流域に関する過去に起こった災害の記録や地域に伝わる災害伝承を収集・整理し、そこから得た災害教訓を活かして地域の防災力向上に役立てていく試みに取り組んでいます。
貴重な資料、ご意見などございましたら下記連絡先にお知らせください。
<連絡先> 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会事務局
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
担当：調査課 (電話：0265-81-6415)
<編集> 日本工営株式会社
※本誌の記事・写真・図表の無断転載は強く禁じます。

・飯田市に伝わる災害おはなしマップ

○飯田市に伝わることわざあれこれ○

- 三日月の欠けた方が下を向いてゐると雨
- 南山に雲がかかると雨が降る
- 恵那山に雨が降るとすぐこっちにやってくる
- 東夕立は降りが強く曇り
- 雲が北へ向くと必ず雨、東に向くと山雨
- 蜂が巣を高い所につくると検風がなく、低い所につくると台風がくる
- 蜘蛛の巣が沢山かかると晴れる
- 雨蛙が鳴くと雨が降る
- 蛙がはねると雨が降る
- 猫が耳をこすると雨が降る
- 蟻の底に火がつくと雨が降る
- おのこげ茶煮なぬ(落ちてこなし)とこころ、水の近めとこころ、風の当たらないとこころに家を建てる

飯田市に伝わる 災害おはなしマップ



天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会

飯田市に伝わる災害 おはなしマップ

●天竜川のおはなし

天竜川は、昔から大雨が降ると川筋が変わるほどに氾濫したので、「あばれ天竜」といって恐れられていました。また、伝説も多く残されています。

むかし南の海に住んでいた大きな竜は、暴れんぼうで気性が荒く、仏様に天の果へと追いやられてしまいました。竜は、天に昇ってから雲や風をけちらし、強そうにそびえるハケ岳にけんかをしかけました。ぐるぐると山に巻きつき締めつけたので、こらえきれなくなったハケ岳はどかんと噴火しました。その勢いで竜は吹き飛ばされ、伊那の山々の間にどっさりと落ちました。その跡に川が流れ、天竜川と呼ばれるようになったといわれています。

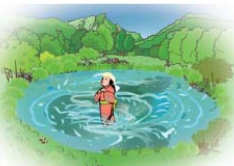
むかしのおはなしは、川がときに恐ろしい姿に変わり、襲いかかってくることを教えてくれています。



★ 飯田市に残る災害にまつわるおはなし・・・1～4ページ
● 水害にまつわる飯田市の石碑や指標・・・5～6ページ

★ **貝鞍が池の主と人柱がわりの墓石（飯田市川路）**

池や川には主の大蛇や竜が棲んで
いるといわれます。むかし、川路村
の天竜川沿いには、貝鞍が池と呼ば
れる池がありました。この池を埋め
立てて新田をつくるということにな
りましたが、人々は蛇のたたりを
恐れ、人柱がわりにご先祖様の墓石を埋めて主の怒りを静めました。



いよいよ埋め立ての日、村で見慣れぬ美しい娘が、天竜川に沿って大下条にある深見の里へと急ぐ姿が見られました。深見の里では、妻畑が広がり吹き渡る風が穂先を揺らし、村人は穏やかに暮らしていました。

ある日、この里に居ついた娘は、井戸に水を汲みに行ったまま帰ってきませんでした。井戸には娘の下駄が脱ぎ捨ててあり、哀れに思った村人は井戸の底をあらいましたが、娘の姿はありません。

しばらくすると、晴れ渡った空が急に暗くなり、大雷雨が深見の里一帯を真っ暗闇に包み込みました。雨があがり、村人が辺りを見回すと、妻畑が大きな池に変わっていました。驚いた村人は、お祭りをした水の盃を飲めたとされています。

このように、主の大蛇が棲んでいる池や川を、人々が脅かすことによって天変地異がおこるおはなしは、伊那谷にたくさんあります。

- 主の大蛇が池に棲み続けることができなくなり、他の池に移り棲むというおはなしは、下伊那地域に多く伝わっています。
- 池が洞の主（飯田県町切石） ○蛇が池の主（阿智村浪合蛇峠）
- とうちやげの池の大蛇（天龍村神原）

★ **水に挑んだ長左衛門のおはなし（飯田市北方）**

水に挑み、偉業を成し遂げた山本長左衛門を称える石碑があります。むかし、新井川は、よき山抜けが起こり、荒れ果てていました。



長左衛門はこのことを知り、村人を救うために飯田の殿様に河川工事を願い入れ、仕事にとりかかりました。

ところが、降り続いた雨で水かさが増し、弱くなった土手が崩れ、家や田が流されてしまいました。村人から訴えられた長左衛門は、牢屋に入れられてしまいましたが、村のために用水を完成させたいという思いは変わりませんでした。牢屋の中で熱心に設計書をつくり直し、それが認められて再び河川工事を開始することができるようになりました。

そして長左衛門は、村人の非難にめげることなく、ついに用水を完成させたのです。このおかげで立派な水田ができ、村人からは感謝されるようになりました。

石碑は今もなお、水害に立ち向かった人の姿を伝えています。

★ **子泣き石（夜泣き石）（飯田市中郷別荘）**

月れた山から大きな石がぶつかり合い、火花を散らしながら濁流とともに流れてきます。



正徳五年（1715年）未満水の時、小さな赤ん坊が、野底川から運ばれてきたという大石の下敷きになりました。それ以来、赤ん坊の悲しそうな泣き声が聞こえるようになり、哀れに思った近所の人たちが石の上にお地藏様を祀ったところ、泣き声がヒタリと止んだと伝えられています。

（「下伊那川たんけんブック天竜川とわたしたちのくらし」より）

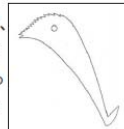
★ **大宮諏訪神社への祈願（飯田市宮の前）**

むかし、正徳五年（1715年）未満水の時、荒れ狂う濁流から人々が大宮諏訪神社の高台に逃げ集まり、一心に祈願しました。すると、水の流れが野底川と松川へわかれ、飯田は大災害を免れました。以後、風水書鎮護の神として崇められていたといわれています。（「東野の百年誌」より）

- 伊那谷の水害は「満水」といって恐れられてきました。
- 満水は、天竜川沿いの低い土地でおこるだけでなく、高台の上や山すそなど、あらゆる場所に水と土砂がおそう伊那谷特有の土砂災害です。（「三六災害40周年 伊那谷の土石流と満水」より引用）
- 中でも正徳五年（1715年）の未満水は、未曾有の大災害として伝えられています。

★ **諏訪宮のなぎがま（飯田市中郷上町）**

むかし、飯田市中郷に祀られていた諏訪明神が、大洪水で今の諏訪宮まで流されてしまいました。その諏訪宮には、なぎがまが二本祀っており、水害があったときに祈願者がなぎがまを持って川に行き、川すじをひくとその通りになったと伝えられています。（「天竜川の災害伝説」より）



- 本来諏訪信仰の中で風切りの薙い鎌として用いられたものが、天竜川流域では洪水の瀬を切る道具として用いられました。
- 豊丘村では、大水がでたときに明神様でお祭りをし、神様からいただいた瀬分け鎌を持ってはだかになった大勢の若者が天竜川へとびこみ、瀬分け鎌を引くとたちまちに瀬が変わって村が助かったというおはなしが伝えられています。（「天竜川の災害伝説」より）

★ **水神・山の神（飯田市中郷・南信濃）**

むかし、遠山谷では雨がたくさん降ると、水荒れ（洪水）と山荒れ（山抜け）とが同時に襲いかかってくることから、山と水が関連する場所（山峡の橋のたもとや川を見下ろす山裾など）に水神と山の神の碑をたて、荒ぶる神を静めました。



（山の神、水神とオタカラ）

また、山の神と水の神が結び合って水の供給源となることから、水源となる山にも祀られています。（「遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造」より）

- 本来遠山谷には「山の神・水神」と二つの神の名が並んで刻まれた石碑がたくさんあります。石碑とともに、山の神を表す赤い半紙と水神を表す白い半紙を二つに折り竹串にはさんだ「オタカラ」といわれる幣束が祀られています。（「遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造」より）

★ **北原の土石流（飯田市下久堅北原）**

むかし、正徳五年（1715年）未満水の時、飯田市下久堅北原で土石流が発生し、一晩で北原の裏の洞がぬけてできました。

またこのとき、洪水によりたくさんの流木が流れてくるので、天竜川にそれを拾いに行った人たちも多く、とうとう虎岩（飯田市下久堅）の五右衛門さんや和久平（飯田市下久堅）の助次郎さんは濁流に飲み込まれて行方不明になってしまったと伝えられています。（「天竜川の災害伝説」より）

洪水を鎮めるために祀られた水神碑や災害からの復興を記念した石碑・出水のめやすをはかった物が飯田市にはたくさん残されているよ！

水害にまつわる飯田市の石碑や指標

- 1 烏帽子石（えぼし岩）（飯田市川路姑射橋下流左岸）**
 むかし、仙人が宴をして酒に酔ってしまい、烏帽子を忘れていったあとにできた岩と伝えられています。
 地域では、洪水の時の出水規模のめやすとされてきました。
- 2 川路郷家屋移転記念碑（飯田市川路）**
 三六災害により川路地区の低平地の家屋は壊滅的な打撃を受け、災害後この地区の人々は移転しました。（「三十年のあゆみ」より）
- 3 三六災害最高水位標（飯田市川路）**
 天竜川総合学習館かわらんべ前の河原にあります。（「下伊那川たんけんブック 天竜川とわたしたちの暮らし」より）
- 4 三六災復旧記念碑（飯田市龍江）**
 三六災害からの復興を記念して建立されました。（「三十年のあゆみ」より）

- 5 川路村からの移籍記念碑（飯田市時又）**
 時又の旧川路村からの移籍記念碑で、裏面に川路から時又に移籍した人々の氏名が記されています。（「三十年のあゆみ」より）

- 6 弁天引堤記念碑（飯田市松尾）**
 飯田松川の右岸から弁天橋を経て清水にかける松尾堤防を記念して建立されました。（「三十年のあゆみ」より）

- 7 河原弁天（飯田市弁天橋付近）**
 弁天橋下流左岸側の河原の自然石の上に祀られている弁天さまで、高遠の弁天さまと同様に出水規模の目安にされてきました。（「三十年のあゆみ」より）

- 8 徳本さまの碑（飯田市上郷別符）**
 正徳五年（1715年）未満水の後、徳本和尚が洪水で亡くなった人を弔ったと伝えられています。

- 9 九頭竜像（飯田市上郷飯沼北条 御岳神社）**
 九頭竜は治水の他、病氣平癒・火防・虫除けなどにも霊験があり、戸隠の山伏・御師が県外各地を回ってお札を配り、頼まれれば祈禱もしたといわれています。

むかしから語り継がれてきた災害のおはなしには、災害から身を守る知恵や「二度と悲しい思いをしてほしくない」という人々の願いが込められているよ！もっとくわしく知ってみよう！

- まずは、家族や地域の人に聞いてみよう！
- 図書館で市町村誌や本を調べてみよう！
- おはなしにまつわる場所に行ってみよう！

体験談・災害の記録に関する本

- **語り継ぐ天竜川シリーズ**
 天竜川流域の災害・環境・歴史・文化などをテーマに執筆され、現在全60巻。天竜川上流河川事務所のホームページからダウンロードすることができます。（http://www.tenjo.go.jp/jimushcho/hyaka/publication/pbl_tell/pbl_tell.html）
- **「濁流の子 伊那谷災害の記録」**（昭和39年12月23日発行）
 著者：碓田栄一 企画：建設省中部地方整備局天竜川上流工事事務所
- **「続・濁流の子 伊那谷昭和36年災害をのりこえて」**（1993年3月発行）
 企画：建設省中部地方整備局天竜川上流工事事務所
- **「三六災害二十周年記念誌 恐怖の豪雨」**（1981年10月発行）
 編集：三六災害二十周年記念誌編集会 出版：上郷村職員互助会

学習施設

- **天竜川総合学習館かわらんべ**（<http://www.tenjo.go.jp/kawaranbe/>）
- **飯田市美術館**（<http://www.wida-museum.org/>）
- **大鹿村中央構造線博物館**（<http://www.oskjanis.or.jp/~mt-muse/>）

参考文献

- **「下伊那川たんけんブック天竜川とわたしたちの暮らし」**（平成19年4月1日発行）
 編集：下伊那川たんけんブック編集委員会
 企画・発行：国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
- **「三六災害40周年 伊那谷の土石流と満水」**（平成13年5月1日第2刷発行）
 編集：松島信幸・亀田武巳・村松武 発行：伊那谷自然友の会・飯田市美術館
- **「東野の百年誌」**（昭和45年12月発行）
 編集：東野百年誌編集委員会 出版：東野公民館
- **「天竜川の災害伝説」**（平成5年3月19日発行）
 著者：笹本正治 企画・発行：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
- **「遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造」**（平成9年3月15日発行）
 著者：浮葉正親 企画・発行：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
- **「三十年のあゆみ」**（昭和55年3月発行）
 発行：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所

お願い

天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会では、天竜川上流域に関する過去に起こった災害の記録や地域に伝わる災害伝承を収集・整理し、そこから得た災害教訓を活かして地域の防災力向上に役立てていく試みに取り組んでいます。
 貴重な資料、ご意見などございましたら下記連絡先にお知らせください。
 <連絡先> 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会事務局
 〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
 国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
 担当：調査課（電話：0265-81-6415）
 <編集> 日本工営株式会社
 ※本誌の記事・写真・図表の無断転載は堅く禁じます。

- ・ あばれ天竜にまつわるおはなしマップ

あばれ天竜にまつわる おはなしマップ



天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会





★ 理兵衛堤防 (中川村片桐)

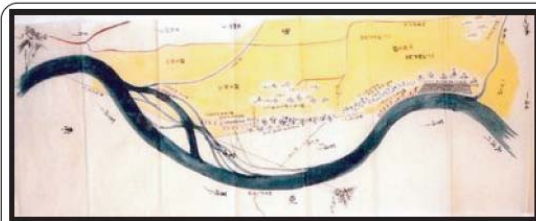
理兵衛堤防が築かれた地（前沢川と天竜川の合流地点）は、やわらかく堆積した扇状地を山地から流れ出る支流が短期間で深くけずりとなって谷となる切込地形をなしています。雨が降ると付近一帯の雨水が前沢川に集中して氾濫や土石流を引き起こし、あばれ天竜の濁流とともに、心血を注いで開墾した田畑や人々に襲いかかってきました。やむなく土地を離れる人々もいたほど災害による大打撃を受けながらも、人々は幾多の困難を乗り越え、生活を守るために水との闘いを繰り返してきました。

●理兵衛堤防とは
 前沢川の巻人百姓（大地主）であった松村家は、1千石のお米がとれたという田島たんぼの約2割を所有していました。未曾有の災害と伝えられている正徳五年（1715）の未満水の時、村は荒廃し、理兵衛忠欣は築堤を決意したといわれています。そして、寛延三年（1750）に川除普請（堤防工事）を幕府に願い出て、大石積の大工事を始めました。工事は、冬と春の農閑期における百姓の稼ぎになるように進められ、明和八年（1771）に至るまでに5回の修理をしながら始め30間、後に100間の堤防を築いたといわれています。翌年から文化五年（1808）に至るまでの工事は、度重なる無常な災害の大打撃を受けながらも子の常彦、孫の忠良へと引き継がれ、この間に造られた堤防を「理兵衛堤防」と称しています。堤防の工事費用は、忠欣が行った寛延三年から文化五年までを含めると3万2千両（江戸中期の平均米価1兩＝約4万円）で換算するとおよそ12億8千万円に相当）に及び、関わった人足は計57万6千11人といわれ、莫大な私財を投じて造られました。
 その後も文政十一年（1828）の洪水で大きな被害を受けており、代々堤防の復旧を行っている記録が残されています。また、前沢川の合流部付近にも堤防が造られており、今もその姿を見ることができます。

●理兵衛堤防に関する略年表

西暦	年号	事項
1635	寛永十二年	・水害による大被害を受け、理兵衛の祖先(忠興)は土地を離れ七窪に移住。数十年後、現在の中川村田島に戻り、荒廃した耕地の復旧・開拓に努める。
1715	正徳五年	・正徳五年の未満水 ・理兵衛忠欣の妻父(忠範)が私財を投げ打って飢えに苦しむ村人を救済し、貧困に闘います。
1750	寛延三年	・理兵衛忠欣が建造の一部を処分したり、新しく建造の業を始めるなどして傾いた家運を挽回し、築堤を幕府に願い出て、大石積の大工事を始める。
1756	宝暦六年	・大満水にて前に築いた堤防がすべて流される。
1785	明和二年	・大満水にて堤防穴潰。
1771	明和八年	・寛延三年より21ヶ年の間に6度の築堤工事を実施、大石積三十間及び前沢川下より田島前青島山に至る長さ百間の堤防を築く。(詳細不明)
1772	安永元年	・現存する理兵衛堤防の工事を始める。 (大石積長さ百間・高さ四間半・馬踏二間半)
1778	安永七年	・大満水にて穴潰れ、二度の工事を要する。
1789	寛政元年	・六月十七日、十八日の大満水にて堤防のほとんどが押し崩される。 ・理兵衛忠良が幕府に急ぎ普請を願い出て工事を始める。
1792	寛政四年	・七月十三日の大満水にて前沢川の出水が激しく天竜川との合流部で穴が崩れる。 ・急ぎ普請を願い出て工事を続ける。 ・堤防防護のための樫木並木の植え付け完了。
1808	文化五年	・前年から二年続いた大満水にて穴が崩れる。 ・理兵衛忠良が急ぎ普請を願い出て工事を始める。 ・この工事によって完成された堤防が現在残っている理兵衛堤防である。

1 参考文献>「中川村誌 中巻」(平成18年3月)編集:中川村誌編纂刊行委員会 発行:中川村
 「理兵衛堤防」(平成13年3月30日)著者:下平元護 企画・発行:国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所調査課



▲理兵衛堤防の絵図（松村家所蔵、作成時不明、右二134絵図彩色）

●理兵衛堤防の特徴

堤防を守るために水の勢いを緩めたり、流れの方向を変えたりする「刎ね」を水のある場所に石積で造り、水の流れが対岸へ行くように設置されています。堤防に使われた石は、前沢川の上流域から選ばれた市田花岡岩で、大きな石を切り出して堤防の表側に積み上げるとともに、裏側にも置いて、洪水によって壊れることを防ぐようにしてあります。

●平成18年7月豪雨災害で姿を現した上流部

平成18年7月豪雨災害の時、天の中川橋上流部のコンクリート護岸が洗掘されて決壊し、理兵衛堤防の上流部側およそ80mが姿を現しました。

また、堤防の河川側中段に沿って71mの石の部分（40m）と木の部分（31m）からなる灌漑水路が発見されました。現在は、復旧工事の終了後に埋め戻し保存がなされ、木樋の一部が中川村歴史民俗資料館に保存されています。



▲姿を現した堤防の上流部



▲発見された水路

●あはれ天竜に挑んだ理兵衛忠欣

文化十二年（1815）忠欣の33回忌に当りその孫の忠良は京都吉田神延宮に請うて祖父の神号（天流功業義公明神）を授かりました。

これを記念して石碑が建立され、水神や九頭竜碑とともに今も祀られています。（三十年のあゆみより）



▲理兵衛を祀った石碑

●「聖牛」とは

組み上げた丸太を籠籠などを載せて川底にすえつけ、川の急な流れを抑える水制工法で武田信玄が考案したといわれています。棟木の長さによって中聖牛・大聖牛・大々聖牛などと呼ばれています。子の常邑は、寛政元年



（1789）六月の大満水における復旧工事の際、大々聖牛を用いてみ切り大石積を施して堤防を完成させました。大々聖牛は大木が必要で費用がかかることから、これをやる所は少なかったようです。

—メモ—

- 長さの尺度：100間（けん）≒182m
- 貨幣価値：江戸中期の平均米価で換算すると1両≒約4万円で算定



参考文献>「天竜川上流工事事務所 三十年のあゆみ」（昭和55年3月）編集：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所 発行：（社）中部建設協会

★石神の松（中川村大草）

石上の松には、洪水にまつわる伝説が残されています。三共地区の人々は、毎年3月からお盆前まで松の消毒や草刈などの手入れを行っています。また仲林地区の人々は、毎年伝説にまつわる祠の前に集まり、和尚さんと呼んで「行者様のお祭り」を盛大に行っています。今でも石上の松は、地域の人々の信仰の対象になっており、伝説と共に洪水の史実が伝えられています。



▲石神の松、中川村の指定天然記念物になっています。

●水難除けの祈禱をした行者様



元和の頃（1615年～1624年）、法力のすこぶる顕著な山伏（仏道修行のために山野に起居する僧）が常泉寺に寄寓していました。

時を同じくして天竜川は、洪水による氾濫をしきりに起こしていました。困り果てた農民たちは、常泉寺に寄寓していた行者（山伏）を頼り、水難除けの祈禱をしてもらいました。

▲祠の中の行者様 もらいました。

行者は熱心にお経を唱えながら21日間の祈禱を続け、満願の日にとうとう精魂尽きて倒れてしまいました。

このとき死に先立ち、手植えの松を水神に手向けたのが今に残る「石上の松」だと伝えられています。遺骸が葬られた祠は、「山伏塚」とも呼ばれ、今も地域の人々から「行者様」といって崇められています。



▲行者様が祀られている祠、石神の松を見守るように鎮座しています。

●釜淵の主

石神の松の下を流れる天竜川の淵は、釜淵と呼ばれています。そこには、主の大きな鯉が棲んでいて、九頭竜の化身であるといわれていました。ところが、ある年の洪水で主の鯉は、淵の外に跳ねて溺れて死んでしまいました。里人がその鯉の死骸を今の石神の地に手厚く葬り、塚を築いて水神として祀ったとも伝えられています。

—メモ—

- 中川村三共地区には、天竜川にまつわる伝説・信仰が今も根づいています。



参考文献>「南向村誌」（昭和41年3月20日）編集：南向村誌編集委員会 発行：中川東公民館

★ 出砂原の大石 (高森町下市田出砂原)

たくさんの雨は山を崩し、土砂と共に大きな石が火花を散らしながら泥流となって川を流れてくんだり、一瞬にして泥だらけの扇状地を形成します。

JR市田駅近くに残る大石は、伊那谷で未曾有の大災害と語り伝えられている「正徳五年の未濁水」の時に大島川の上流から流れてきたものだとわれています。大石の上には大小二体のお地藏様が祀られています。

出砂原の大石は、私たちが暮らしている土地に起こった大地変の史実と災害を経験した人々からのメッセージを今に伝えてくれています。



▲出砂原の大石

●未曾有の大災害「正徳五年の未濁水」

正徳五年乙未年（1715）六月、月初めから雨が降り続いていました。十八日の夜明け方から、雨はだらいをぶちまけたようなどしや降りとなり、膝を並べて話す声が聞こえない程でした。大島川上流の不動滝近くのかぎかけという高い山が崩れ上流部を堰き止め、前の沢の下・わる沢とこなみ沢の間に天然ダムができました。そして漫々と水がたまった天然ダムの一角が決壊し、天地も崩れるばかりの大音響と共に赤土色の濁流が押し出し、川幅は数十間の広さとなって押し流してしまいました。吉田川原から天竜川へ注ぐ所では、押し出された多量の泥水のため、一時天竜川も堰き止められ、海のようにになりました。そのため、天竜の水は逆流し、一旦流されてきた5尺の酒桶や土蔵の土台が竜の口まで戻っていったと伝えられています。（高森町史上巻後編より）



▲前亡後死三界万霊塔

安養寺の住職であった了溪禪師が、溺死した人々の霊を弔い、冥福を祈るために建立したといわれる「前亡後死三界万霊塔」が、出砂原の明照寺前にも残されています。

●出砂原地名が教えてくれること

「出砂原」という地名は、正徳五年の未濁水をはじめ、大島川の氾濫によってできた土石流扇状地につけられた地名です。松崎岩夫氏によるとその由来は、「土砂が流れてきた処（“だ”の発音は“落ちる”という意味、“さ”の原形は“しゅ”、“ら”はあちら・こちらにみられる場所を示す）」と考えられています。昔の人々が私たちへ、土地に対する注意を促してくれているように思えます。

—メモ—

●天竜川流域には「出砂原」以外にも、「水神町」「田島」「青島」「荒井」「生田」「百間井」「わる沢」など洪水や土砂災害にまつわる地名が多く残されています。



参考文献>「天竜川の災害伝説」（平成5年3月19日）著者：世本正治 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所
「高森町史 上巻後編」（昭和47年1月25日）編集：高森町史編集委員会 発行：高森町史刊行会
「地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし」（平成15年3月31日）著者：松崎岩夫 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所

4

★ 惣兵衛堤防 (高森町下市田)

惣兵衛堤防（下市田村大川除）は、突きあたるあばれ天竜の水勢を制ね返し、下市田・座光寺・上郷に250町歩という美田をもたらした、江戸時代より200年あまりに渡って人々の生活を守り抜いてきました。

昭和36年に伊那谷を襲った三六災害の時、人々の懸命な水防活動の最中無念にも流失してしまいましたが、惣兵衛堤防の恩恵は立派な大石積の姿が見られなくなった今日に至ってもなお、度重なる水害から堤防を保護し続けてきた人々によって語り継がれています。



▲ありし日の惣兵衛堤防
(高森町歴史民俗資料館所蔵)

●惣兵衛堤防とは

惣兵衛堤防が造られた地は、古くより鍋釜堤という堤防がありましたが、洪水の度に押し流され荒地となっていました。退廃していた飯田藩の藩政刷新に力を入れた堀親長侯が12歳の時、重臣黒須権右衛門の献策によりこの地に堅固な堤防を築き、天竜川の水を引き入れる灌漑用水を建設して新田を開発し、藩の財政を豊かにする計画を立てました。

工事の主任技師には、現在の飯田通り町で「吉田屋」といって石工をしていた中村惣兵衛が命じられました。飯田で惣兵衛が造った堤防はどれも堅固な出来であると定評があり、75歳齢にもかかわらず起用されたのです。



▲惣兵衛堤防に使われた大石

寛延三年（1750）に工事が始まり、惣兵衛は非常に熱意と熟練した土木技術をかけて築堤に専念しました。石積に使う高さ4尺内外（1尺=30.3cm）の大石は、右持洞より約500m下方の堤防まで竹を敷いた道の上で大勢の人々が木造音頭で引き寄せました。そして宝暦二年（1752）二月、大石を乱れ積にした全長81間の一大岩壁が完成しました。

惣兵衛堤防で制ね返したあばれ天竜の激流は、対岸の村々にとっては脅威であり恨みを持った惣兵衛は、一時飯田の松尾に隠れていましたが、堀候から下殿岡（現在の飯田市伊賀良）に土地を与えられ、87歳で没するまで余生を送りました。

●築堤の測量基準点

惣兵衛堤防の築堤にあたり、領主堀候の紋章にちなんだ亀甲に「上」の文字を刻みつけた「亀甲石」と呼ばれる2つの大石と、今はなき天伯森の祠と畑の中にあつた供養塚が測量の基準点として用いられました。



▲上の亀甲石、用水の取入口付近の位置を決定する基準点
▲下の亀甲石、土地の境界堤防等の距離を決定する基準点

●惣兵衛の偉業を偲ぶ石碑



▲嘉永の水天宮

▲惣兵衛の供養碑

惣兵衛堤防完成から約100年後の嘉永三年（1850）に惣兵衛の偉業を偲び水天宮が建立されました。三六災害で流失してしまいましたが、奇跡的に平成5年（1993）の親水公園造成中に河床から見つかりました。

嘉永七年（1854）には、郷中総意で惣兵衛の偉業を弔った供養碑が建立されました。

参考文献>「高森町史 上巻後編」（昭和47年1月25日）編集：高森町史編集委員会 発行：高森町史刊行会

5



▲市田村大河除絵図（高森町歴史民俗資料館所蔵）に加筆して引用

●惣兵衛堤防の特徴と大井

惣兵衛堤防は、明神橋のたもとから西南へ230間（直線距離）の地点より始まり、岸に沿って弧を描き、尾端へいくほど狭まった形状をしていました。堤防の中央と尾端には、「刎ね」と呼ばれる出っ張りが設けてあり、水を刎ね返すのに役立ちました。

また、築堤とあわせて大井（天竜井とも間夫井ともいう）と呼ばれた用水路の建設が行われ、明神橋のたもとから50間ほど上手に灌漑用水の取入口が設けられました。この大井の完成により、飯田市座光寺をへて上郷別符までの河原が美田へと変わり、巨額な石高を得るにいたりしました。

惣兵衛堤防と大井の管理は、堤防より西の方角に設けられた「御小屋地」に飯田藩から普請掛かりが出張して復旧工事の監督をしたり、井番がつめて大井の水門調節を行い、村では川除世話係というものが堤防事務に関する処理を行っていたといわれています。

参考文献>「惣兵衛川除」（平成3年3月15日）著者：市村威人、市村栄人 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所
「天竜川上流工事事務所 三十年のあゆみ」（昭和55年3月）編集：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所 発行：（社）中部建設協会

●語り部に聞く 惣兵衛堤防流失の時

水防活動では各々が、自分の家の庭木を全部切って木流しをして一生懸命やっておたんですよ。そうしておたらね、4時ごろにリーダーが「もうこっちへ避難せよ」「流れが弱くなるとおたたちのところへぶつかってくる」と言うんですよ。



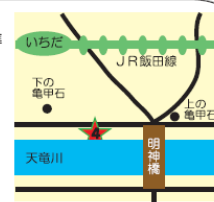
▲惣兵衛堤防決壊を見守る人々（三十年のあゆみより）

それで見ておたら急にね、竜が川の面にわーっと出てくるような感じ、それは濁流が、川の一番の中心部の部分が盛り上がりてきたんですよ。たちまち惣兵衛堤防の上を水が乗り越えてきたんですよ。後ろは弱いですからだんだん侵食されていって、やがて。

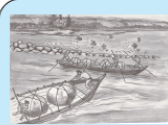
（惣兵衛堤防に使った）石は全部オジマガハラ（土石流）の石を使ったんだよね。だから、私たちが住んでいる場所は、祖先がそういうところを開拓して住めるようにして何百年かたっているわけですから、これは成り行きというか自然の摂理というか、そういうもの姿を見ておるんだということ、それはしっかりと目に焼きついているんです。（高森町在住MKさん）

一メモ

●昔の土木工事では、亀甲石や要石が基準となる石として利用されていました。



5 伴野堤防（豊丘村伴野）

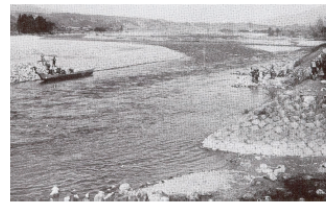


▲紙芝居「開墾堤防」

美濃高須藩が治める神籬村伴野の地は、対岸にできた惣兵衛堤防の刎ね返しをまともに受け、賽の河原の石積に等しい荒地と化していました。

江戸より帰郷した松尾千振は、郷土復興のために堤防を造り開墾する計画を力説し、その熱意は希望を失っていた村人の心を動かししました。

明治16年に「開墾組」が創設され、幾多の困難を鉄の団結力で乗り越え、築堤開田の事業を成功させたのです。



▲昭和30年頃の伴野堤防（右）と天竜川（豊丘村誌 下巻より）

●伴野堤防とは

万延元年（1860）の洪水による伴野新田の流失は三六災害を凌ぐものとなり、明治初期に連続して洪水に見舞われた村の疲弊は極みに達していました。松尾千振が率いる「開墾組」は33名の有志で構成され、荒地の所有者から無代無償収権にて土地を借りて開田し、その収獲物を財源として築堤し、25年後に立派な水田にしてから返還するという大事業を始めました。明治19年（1886）5月の洪水によりこれまで築いた堤防のほとんどが流されましたが、開墾組からは一名の脱退者もなく再建に向いました。

明治25年2月16日、松尾千振は堤防の完成を待たずして39歳という若さで他界してしまいました。開墾組は暗闇に光明を失いましたが、松尾千振の志を継ぐことなく更に団結し事業を進めました。度々見舞われる水害にめげることなく、明治39年（1906）に堤防の大筋が完成し、内堤も美田へと姿を変え、明治42年（1909）に土地所有者への返還が行われました。

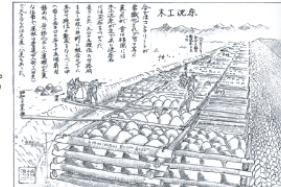
伴野堤防は、三六災害でほとんど流失し、現在は復興事業によって近代的な堤防が建設されています。



▲開墾組の功績を伝える開墾組影功碑

●「木工沈床」とは

材木を方格に組んだ枠の中に玉石をつめて護岸の前面に沈設し堤防の根固めをする工法です。豊丘村誌によれば、粗朶沈床が天竜川の急流に適さなかったため、伴野堤防の工事指導に関わった飯田土木出張所主任の小西竜之助が、新たに木工沈床を考案したと伝えられています。



▲昭和24年頃の木工沈床による護岸工事の様子（三十年のあゆみより）

一メモ

●伴野地区には、開墾の碑以外にも三六災害復興記念の碑や松尾千振の偉業を讃えた碑が残されています。



7 参考文献>「豊丘村誌 下巻」（昭和50年12月1日）編集：豊丘村誌編集委員会 発行：豊丘村誌刊行会
「開墾堤防」（平成3年3月15日）著者：竹村浪人 企画発行：建設省中部地方整備局天竜川上流工事事務所
「天竜川上流工事事務所 三十年のあゆみ」（昭和55年3月）編集：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所 発行：（社）中部建設協会

★ いし かわ よけ ざこうじ 石川除 (飯田市座光寺)

南大島川と土曾川に挟まれた天竜川沿いの川原地帯は、洪水の度に水がつくところでした。石川除の周辺は、昔の殿様が釣りをした場所であると伝えられている塚が残っており、昔は天竜川の川筋だったと思われる。江戸時代になると市田村出砂原にできた惣兵衛堤防の効返しに対抗し、対岸の伴野村に強固な堤防ができ、そこに突き当たった激流がまた対岸の座光寺村大島川渡を直撃するようになりました。そこで、村の頭分は知恵を出し合い資金を集め、飯田藩に石川除の建設を願い出て、両者折半のもとに石積の堤防が築かれました。



▲現存する石川除

●石川除とは

大島川渡への強固な堤防建設を願う村人の熱意により、216両2朱の資金が集まりました。飯田藩への石川除建設願いが聞き届けられ、文政十一年(1828)から3年間をかけて総延長128間5尺、堤防の北に大井の水門が設けられた石川除が完成しました。

その後、度々襲ってくる水害と闘いながら何度も修復がされ、現存する石川除は、明治元年(1868)に嵩上げ工事を施した時の姿をしています。

三六災害(1961)の時、惣兵衛堤防決壊の報が伝わって間もなく、あばれ天竜の濁流が一拳に南下してきましたが、石川除とその先に続く水神堤防副堤によって遮断され、かすみ口のところ一時滞水し、その後天竜川へと放流されました。先人が苦心を重ねて築き上げた石川除の恩恵がいかに大きかったということが思い起こされます。



▲南大島川と天竜川の合流部



▲座光寺治水区の歴史を伝える治水碑と石川除水神

●川原新田の開発に尽力した北原米太郎

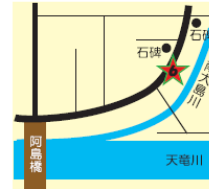
明治の頃、中羽場にいた寺地の当主北原米太郎氏は荒地になっていた石川除周辺の開墾に着目しました。同志を募り、明治24年より数十年を要して新田開発に尽くしました。その功績を讃えて「北原氏墾田碑」が石川除の西北隅に立てられています。



▲川原開墾記念碑

—メモ—

●今もひっそりとたたずんでいる石積からは、江戸時代の立派な施工技術を確認することができます。

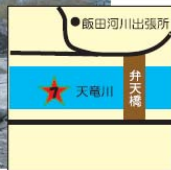


参考文献>「座光寺村史」(平成5年1月30日)編集:座光寺村史編纂委員会 発行:座光寺村史刊行委員会
「空から見た天竜川」(平成18年3月)企画発行:国土交通省天竜川上流河川事務所

★ へんてん 弁天の大岡さばき (飯田市松尾)



▲弁天橋下流の中洲にある弁天岩



★ 飯田市松尾地区



▲松尾地区の水防施設



▼排水ポンプ車の活動状況

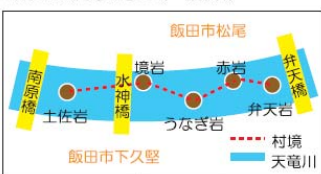
●洪水がもたらした境界争い



元文三年(1738)の洪水で天竜川の流が西寄りになり、島田村(現飯田市松尾)と対岸の虎岩村・知久平村(現飯田市下久堅)との間で境界争いが起こりました。

▲弁天の大岡さばき文(一部抜粋)

島田村は江戸幕府の奉行所へ訴え、大岡越前守らによる審理が始まりました。島田村の村入用帳に「弁天宮建替費用」とあるのが証拠となり、弁天岩に祀られた弁天社は東を向いたまま島田村のものとなり、岩を結ぶ線が村境とされました。



▲さばきのあとの境界

●平成18年7月豪雨災害の時

飯田市松尾地区の水神橋のたもと周辺は、36災害58災害など過去に何度も水害に見舞われている地域です。平成18年7月豪雨災害においても冠水し、排水ポンプ車による支援活動が行われました。



●語り部に聞く 昭和36年災害の様子

天竜川沿いにあった工場の家が、水がついてくることによって浮きまて、徐々に本流の方へ導かれて、天竜川にかかっている水神橋に激突してこぼれみじんになるという状況を見て、「これは恐ろしい」という感覚を受けました。災害後は、今でいうボランティアとして泥だしを行い先生と子どもも出掛けました。災害を経験して思ったことは、「まずは人命」という形の中で、避難体制を準備しなくてはいけないこと、行政だけでなく住民の皆さんも巻き込んでそういう意識をいかにして持ち続けていかくが大事で、今後やっていかなければいけないところだ。(飯田市勤務H.Kさん)

参考文献>「下伊那川たんけんブック 天竜川とわたしたちのくらし」(平成19年4月1日)編集:下伊那川たんけんブック編集委員会 企画・発行:国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所
「松尾村誌」(昭和57年2月15日)編集:松尾村誌編集委員会 発行:松尾村誌刊行委員会

わかしから語り継がれてきた災害のおはなしには、災害から身を守る知恵や「二度と悲しい思いをしてほしくない」という人々の願いが込められているよ！もっとくわしく知ってみよう！



学習施設

※詳しくは、各施設へお問い合わせください。

- **中川村歴史民俗資料館**
〒399-3802 長野県上伊那郡中川村片桐4757番地
TEL : 0265-88-1005 有線 : 88-1005 (中川村教育委員会)
(http://www.vill.nakagawanagano.jp/old_site/kankou/menu/rekisi/index.html)
- **高森町歴史民俗資料館**
〒399-3103 長野県下伊那郡高森町下市田2243
TEL : 0265-35-7083
(<http://www.town.takamorinagano.jp/tokinoeki/index.html>)
- **天竜川総合学習館かわらんべ**
〒399-2431 長野県飯田市川路7674
TEL : 0265-27-6115
(<http://www.tenjo.go.jp/kawaranbe/>)

お願い

「天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会」では、天竜川上流域に関する過去に起こった災害の記録や地域に伝わる災害伝承を収集・整理し、そこから得た災害教訓を活かして地域の防災力向上に役立てていく試みに取り組んでいます。この資料を広く活用していただきながら、地域に現存する防災資源を再発見し、水害や災害に備える力を高めていただけたらと思います。貴重な資料、ご意見などございましたら下記連絡先にお知らせください。

<連絡先> 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会事務局
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
担当：調査課（電話：0265-81-6415）

<編集> 日本工営株式会社 防災マネジメント室
※本誌の記事・写真・図表の無断転載は堅く禁じます。